

L A R G O

CLASSIC IS AT ITS BEST ON TV CM
OSAKA PHILHARMONIC ORCHESTRA/CONDUCTED by YUKINORI TEZUKA



DAMP

制作にあたって

DAM会員の皆様、日頃のご愛顧ありがとうございます。ところで、このころ、TV-CMで、クラシックの名曲が使われることが流行とされていることは、皆様も良くご存知のことと思います。この種のものとして、古くはラジオ時代から、文明堂の「天国と地獄」が有名でしたが、実は当社の「ベートヴェンの交響曲第5番「運命」、同、第1番」を使ったTV-CM「第5じゃない、そう第1…」もクラシックTV-CMのほしりとして、10数年前に話題となったことを、ご記憶の方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

そして最近になって、ホンダの「ポレロ」ニッカの「オンパ・マイ・フ(ラルゴ)」サントリーの「大地の歌」等で、一気に火がついたわけです。レコード各社から、それらのクラシックCM集が、カセット、LP、CDで次々と競って発売されましたが、特にキャスリーン・バトルの「ラルゴ」を収録した45回転LPは、25枚以上売れ行きかたで、クラシックの国内レコードとしては、驚異的な人気となっています。

そしてこの5月～6月にかけてのキャスリーン・バトルの来日でその話題は頂点に達した感があります。

今回で66タイトルのDAMオリジナル・ソフト(DAM45、VLP45、DAM-CD)の中で、クラシックは、半分以上を占める重要なレパートリーですが、この機会に、普段クラシックをお聴きにならない方にも、気軽にクラシックの名曲を楽しんでいただこうと、この「ラルゴ」◎CMはクラシックが大好き」を制作いたしました。

同じやるなら、DAMらしく他に無いものを用いうことで、手塚幸紀氏と大取フィルハーモニー交響楽団(以下「大フィル」と略します。)及び東芝EMI株の絶大なご協力を得て、フル・オーケストラにより、クラシックCM集を、DAMオリジナル録音いたしました。

朝比奈隆氏(音楽監督)のもと、大フィルは、ブルックナー、ベートヴェン、マーラーの演奏で特に高い評価を受けていて、そのレコードも多く、日本を代表するオーケストラの一つです。今回はTV-CM集ならではの、ヘンデルからガーシュウィンまで、大塚市交響楽団では、手塚幸紀氏に指揮していただきました。手塚氏は、ヨーロッパ、アメリカで活動された後、大フィル、京都市交響楽団を経て、現在は、新日本フィルハーモニー、名古屋フィルハーモニー、群馬交響楽団の指揮者として活躍されています。更に「ラルゴ」、「大地の歌」、「ラフナー・イン・ブルー」のソリストとして、井岡潤子さん、岩城拓也氏、小原久幸氏という、関西音楽界のホープを起用しましたが、その清新な演奏をお楽しみいただけたことと思います。

録音は近畿大学のご好意で、完成したばかりの木の内装のホールを使用して、'87・3月18日～19日の両日に渡って行われました。

それぞれの収録時間は短いとはいっても、ブルックナーやポレロのような大編成の曲もあり、ソプラノ、テノール、ピアノと3曲のソロもあふ、全14曲のレコーディングは、演奏者にとっても、スタッフにとっても大変にハードなものでした。しかし手塚幸紀氏の、暖かく誠実な人柄と、てきぱきとした機さばきのもと、大フィルならではのダイナミックな演奏を収録することが出来ました。中でもベートヴェン、とりわけ交響曲第1番は、生氣あふれた素晴らしい演奏です。

DAMの録音ポリシーにより、CDにはデジタル録音ということで、ソニーの1630による2チャンネル・デジタル録音が採用されています。(同時録音のDAM45・2枚組「DOR-0149-50」は1/2インチ巾76cm/sec2チャンネル・アナログ録音を採用いたしました。)アナログ・ディスクと違い、内周歪の心配のないCDは、シャープでクリアな音で、全14曲55分を連続してお楽しみいただけます。(DAM45は、内周歪の関係で、CDとは曲順が異なります。)

オーディオ的にも、弦だけの小編成から、標準的な編成、そして、約90名の大編成まで、オーケストラの規模も変化し、更に多彩なソロが加わり、全曲いたるところに、エッセンスポイントがあるといっても過言ではありません。特に雄大なスケールの大太鼓など、全体に重厚な底力を基調としたサウンドが特長です。なお、ダイナミック・レンジが極めて広いので、再生時の音量には、充分、ご注意ください。

なお、今回はなるべく多くの曲を収録するため、殆どどの曲は、TV-CMに使われている部分を中心に数分間の抜粋となつてしまいましたが、参考までにそれぞれの代表的な全曲盤を別項に紹介いたしました。

又、6月より、この手塚幸紀氏-大フィルによる、当社NEW・TV-CM(ステレオ音声)が放映される予定ですので、ご覧いただければ幸いです。

今回のアルバム作成にあたり、手塚幸紀氏、大阪フィルハーモニー交響楽団、ソリストの皆さん、近畿大学、TV-CM写真を提供していただいたメーカー各位、東芝EMI株及びスタッフの皆さん、沢田敏氏に多大なご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。

最後に、来年の当社創立30周年にむけて、更にビッグな記念レコーディングを計画しておりますので、ご期待ください。今後とも皆様のご支援のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

DAM推進委員会 **DAMPC**



ラルゴ CMはクラシックがお好き

Ombra mai fù

手塚幸紀指揮/大阪フィルハーモニー交響楽団

- | | | |
|---|---|-------|
| ① | “ラルゴ”(ヘンデル曲) w/井岡潤子(ソプラノ)..... | 2'59" |
| ② | 「メリー・ウィドウ」より“ワルツ”(レハール曲)..... | 2'23" |
| ③ | 交響詩“モルダウ”より(スメタナ曲)..... | 1'59" |
| ④ | “美しく青きドナウ”より(J.シュトラウス2世曲、作品314)..... | 2'16" |
| ⑤ | 「くろみ割り人形」より“花のワルツ”(チャイコフスキー曲、作品71a)..... | 6'40" |
| ⑥ | 「ピーターと狼」より“ピーターのテーマ”(プロコフィエフ曲、作品67)..... | 0'49" |
| ⑦ | “ラプソディー・イン・ブルー”より(ガーシュウィン曲) w/小原久幸(ピアノ)..... | 5'33" |
| ⑧ | “天国と地獄”序曲より(オフエンバック曲)..... | 2'09" |
| ⑨ | “ボレロ”より(ラヴェル曲)..... | 5'32" |
| ⑩ | “カルメン”前奏曲より(ビゼー曲)..... | 2'13" |
| ⑪ | 交響曲第8番ハ短調第4楽章より(ブルックナー曲)..... | 5'34" |
| ⑫ | 「大地の歌」より第3楽章“青春について”(マーラー曲) w/岩城拓也(テノール)..... | 3'06" |
| ⑬ | 交響曲第1番ハ長調より第1楽章(ベートーヴェン曲、作品21)..... | 7'42" |
| ⑭ | 交響曲第5番ハ短調より第1楽章(ベートーヴェン曲、作品67)..... | 6'00" |

●各収録曲の、TV-CM中で使用されている部分は以下の通りです。

- | | | | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|------------|---------------|-------|-------------|-------------|---------------|
| ①開始後約49秒位より | ②開始後約30秒位より | ③開始後約7秒位より | ④冒頭部分 | ⑤開始後約1分44秒位より | ⑥冒頭部分 | ⑦開始後約30秒位より | ⑧開始後約11秒位より | ⑨開始後約3分20秒位より |
| ⑩冒頭部分 | ⑪冒頭部分 | ⑫開始後約18秒位より | ⑬開始後約5分位より | ⑭冒頭部分より | | | | |

CMはクラシック音楽のショーウインドウ

テレビCFとクラシック●堀内 修

乏しい石油を四苦八苦して使っていたのだが、ふと自分たちが大油田の上に住んでいるのに気がついた。というわけでもないのだろうが、大油田に眠っていた良質の石油、つまりクラシック音楽が、奔流のようにテレビから流れ出た。自動車はレハールのワルツで踊り、ウィスキーはマーラーで杯を満たす。

現役の、オフエンバック「天国と地獄」（あの「カステラ」番、電話は2番です）を別にしても、これまでクラシックがテレビCMに使われた例は、皆無ではなかった。ヨーロッパやアメリカでも、珍

しいというほどではない。ただし、その使われ方は違う。今までは、人々の持つクラシック音楽のイメージに添ったところで使われてきた。商品は、たとえば香水とか宝石。それがよく吟味された美しい映像で出てくる。音楽はモーツァルトにショパンにラフマニノフという具合だ。香水にラフマニノフを合わせたCFのディレクターが、極東の中世の武士たちがヴェルディのオペラ「椿姫」の「乾杯の歌」を歌いながら缶チューハイをぐいぐい飲んでいるのを見たら、びっくりして目を回すのではないか。



確かに、改めて見直してみると、クラシックは音楽の宝庫だ。ヨーロッパの繁栄を背景にして、長年にわたって蓄積し、淘汰してきたクラシックは、ただメロディーという面を取り出すだけだって、相当なもの。その気になって捜せば、適切な音楽はいくらでも見つかる。

けれども、なんとなくわれわれが常識のように思ってきたクラシックのイメージ、上品だとか、長さが大切とか、保守的だとかいったイメージを崩し始めたところに、いまのブームがあるのではないだろうか。これは想像なのだが、ヒットするクラシック・テレビCMは、クラシックに通じている人ではない人によって生み出されているのではないだろうか。ベートーヴェンの音楽は偉大な芸術、なんていうところにこだわっていたら、とても今のCMは作れないはずだ。

たとえばあのキャスリーン・バトルがヘンデルの「ラルゴ」を歌ったウィスキーのCMだ。一見クラシックのこれまでのイメージに近いようだけれど、作ったのはまずクラシックの専門家、あるいはクラシックに通じている人ではない。バトルは良い歌手だし、登り坂の、一部から注目されていた歌手だった。けれども、歌わせるのにことかいて「ラルゴ」とは、ちょっと考えつかない。オペラ「セルセ」の中の Aria で、中学校の音楽の教科書に載っている、どち

らかといえば芸のない歌だ。もしバトルをよく知っていたら、モーツァルトの気のきいたアリアかなんかを選んだらう。ところが実際には「ラルゴ」が大正解だったわけだ。

大体クラシックの曲は長い。ワーグナーの楽劇になると1本ざっと4時間半。「ニーベルングの指環」に至っては、4晩で合わせて15時間などという途方もない長さ。一方テレビCMは極端に短い。1分そこそこ。わずかに15秒というのだってある。一体これがどうして合体できるのか、と旧来の常識で考えてしまっっては、クラシック・テレビCMのパワーを見損なってしまう。断片だろうが、マーラーはマーラーだし、ベートーヴェンはベートーヴェンで、そこからへんの作曲家の力作などより、選びようによってはずっとずっと人を動かす力を持っている。

クラシックは、もともと「芸術のための芸術」で、何かの効用を考えて作られたわけではないのだけれど、気持ちを高ぶらせたり、落着かせたりという効用ならある。断片であっても強い効用を持つのなら、それを商品宣伝に利用しない手はない、というのが、おそらくクラシック・テレビCMの原理みたいなものなのだろう。その原理は確かに正しくて、人はマーラーでウィスキーのグレードを認め、レハールで自動車の軽やかなイメージをとらえる。

宣伝の狙いは見事に成功したのだけれど、受けと

る方だって、受身一方の立場に甘んじない。商品のために豊かな音楽の宝庫クラシックを利用するなら、音楽の宝庫のためにCMを利用してしまおうとする。商品のショーウィンドウであるテレビCMを、クラシック音楽のショーウィンドウとして利用しようというわけだ。

その視点、つまりクラシックのショーウィンドウとしてCMを見ると、実に役に立つのがわかる。常識に添った「名曲集」の枠を越えた広がりを持ち、しかもディスプレイは極限まで切りつめられている。ニューヨークなら五番街、パリならフォーブール・サントノレといった通りの、それ自体がすでに芸術であるような、ウィンドウ・ディスプレイではないだろうか。

今のところ、まだクラシックという巨大な店から、ほんの一握りが取り出され、展示されているに過ぎないのだけれど、金のかかった飾りつけは、十分にその在庫のすばらしさをうかがわせる。思わず足を中に入れてみたくなってもいいし、ショーウィンドウの楽しさを味わいつつ通り過ぎてもいい。



●曲目について

1. 「ラルゴ」——ヘンデル

大ブームとなったスーパーニッカのCMで歌われているのがこれ。ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデルのオペラ「セルセ」(または「クセルクセス」)の中で、セルセが歌うアリアだ。バツハと並ぶバロックの大作作曲家ヘンデルは、オラトリオとオペラを得意としていた。何しろ時代が古いので、たくさんあるオペラも現代ではあまり上演されない。だがこの「セルセ」第1幕のアリアは、あまりにも有名になった。「この深く茂った木蔭ほど」と歌う歌だけれど、ゆっくりと、という意味の「ラルゴ」の名で知られ、さまざまな器楽曲に編曲されている。シンプルな美しい歌だが、ヘンデルの時代にはたくさん装飾をつけて歌われていたらしい。



2. メリー・ウィドウよりワルツ——レハール

いずゞジェミニは、チャイコフスキー「花のワルツ」でも踊るが、この曲でも踊る。ウィーンの、ヨハン・シュトラウスに続く「白銀の時代」に活躍したフランツ・レハールの代表作「メリー・ウィドウ」(陽気な未亡人)の中の有名なワルツだ。このオペレッタは、大金持の未亡人と昔の恋人との恋愛を軸にしている。その未亡人ハンナと恋人ダニロがわだかまりをといて結ばれる場面に出てくる。「唇は黙っているがヴァイオリンの調べは」と歌われる二重唱は、ウィンナ・オペレッタの粋とでも呼ぶべき曲。

3. モルダウ——スメタナ

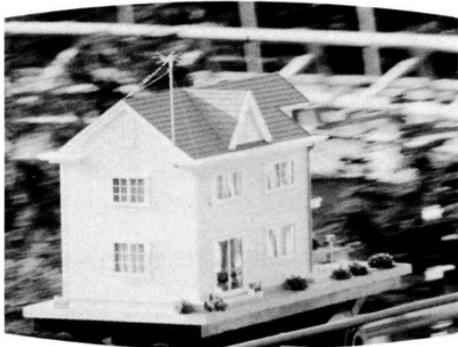
四万十川がボヘミア(チェコスロヴァキア)の大河モルダウに似ているかどうかはわからないが、ウィスキーはどちらの河畔で飲んでもおいしいだろうと思わせるサントリー・オールドのC-M。この曲は、チェコの国民的音楽というべき、スメタナの「わが祖国」の中に入っている交響詩。全6曲のうちの第

2曲だ。モルダウの堂々とした流れと、そのまわり広がる美しいボヘミアの風景が、曲の中に描かれている。



4. 美しく青きドナウ——ヨハン・シュトラウス2世

東京海上の保険にも、宇宙(映画「2001年宇宙の旅」にも使われていた)にも不思議と合ってしまうのが、ワルツ王ヨハン・シュトラウスの「美しく青きドナウ」だ。はじめ男声合唱の曲として書き、それを管弦楽用に直している。ウィーンの近くを流れるドナウ川は、青く美しいとは言いがたいが、この曲で永遠の青さを得た。ウィーンという街のテーマ曲とも呼ぶべき音楽で、毎年元旦に行なわれるウィー



ン・フィルの「ニューイヤー・コンサート」では、必ず演奏されることになっている。踊ることもできるけれど、コンサート用ワルツの代表作だ。

5. 花のワルツ——チャイコフスキー

名バレリーナならぬいすゞジェミニのレパートリーの一つが「花のワルツ」。(この曲は大和運輸の宅急便でも使われている。)バレエ音楽というベータ



ー・イーリッチ・チャイコフスキーの独壇場みたいなところがあり、「白鳥の湖」、「眠りの森の美女」等作曲している。この曲は「くるみ割り人形」の中に入っている。ドイツのロマン主義の作家E・T・A・ホフマンの童話をもとにして作られたこのバレエは、クリスマスには欠かせない演目となっている。少女クララが夢を見ると、くるみ割り人形が王子となって、お菓子の国での冒険が始まる。「花のワルツ」は、このバレエのフィナーレ、お菓子の国の大舞踏会の場面で演奏される、華やかな曲だ。

6. ビーターと狼——プロコフィエフ

森の中を陽気に走るマツダ・カベラのテーマはビーター。ロシア=ソビエトの作曲家セルゲイ・プロコフィエフが、子供たちのために書いた交響的物語

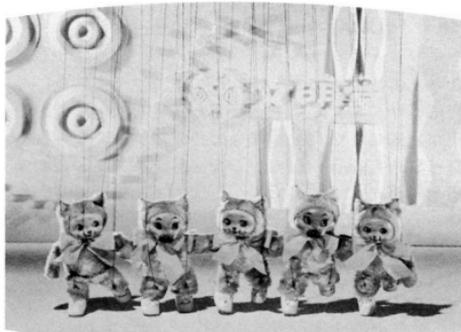


「ピーターと狼」の、少年ピーターを表わす音楽だ。この曲は、各楽器の音の説明などが巧みに盛り込まれ、オーケストラ音楽入門にぴったりなので、音楽の教材として使われるから、知っている人が多いはず。親しみ易い曲だけれど、よく出来ていて、子供向けでないコンサートでも取り上げられる。ピーターのテーマは、簡潔に明るい少年ピーターを描いた音楽。

7. **ラブソディー・イン・ブルー——ガーシュウィン**
きっとニッサン・ブルーバードは都会派の自動車なのだろう。ニューヨークの1920年代が合うのかも知らない。ジョージ・ガーシュウィンが1920年代に発表した「ラブソディー・イン・ブルー」は、ジャズを取り入れた、というよりはジャズとクラシックの境界にあるような、ピアノと管弦楽のための曲。発表当時新鮮な衝撃を持っていたのだけれど、クラシックの仲間入りをしてしまった今も、その新鮮さはそのまま。演奏は後半の一部。

8. **天国と地獄——オッフエンバック**

もはや古典とも呼ぶべき、文明堂カステラのCM。オーストラリアの人形使いの名人によるぬいぐるみのカンカン踊りには、オッフエンバックの曲だ。昔「天国と地獄」と訳され、定着してしまったけれど、「地獄のオルフェウス」というのが、オッフエンバックのオペレッタの名前。オルフェウス神話のバ



ロディーで、底抜けに明るく、風刺の効いたオペレッタだ。その序曲が、カンカン踊りに使われる例の音楽。

9. ポレロ——ラヴェル

Hondaは音楽用語が好きらしい。アコードにプレリユード。プレリユードは前奏曲なのだけれど、ホンダ・プレリユードが登場するときに響くのは、スペインの舞曲の名をとった、モーリス・ラヴェルの「ポレロ」だ。有名ではあるけれどもかなり奇妙な曲で、一つの主題がえんえんとくり返される。変化するのは音色。たったひとつのクレッシェンドがつけられているが、ものすごく長いこのクレッシェンドが生きる。ある舞踏家の依頼で作られた。今でもバレエに使われることがある。

10. 「カルメン」前奏曲——ビゼー

キリン・オフサイドに「カルメン」前奏曲がびつたりとも思えないのだけれど、意外性で案外良いのだろうか。あまりにも元気で真面目な曲の、別の効用かも知れない。それに今は「カルメン」ブームの真只中だ。若くして亡くなったフランスの作曲家ビゼーだが、「カルメン」だけでその名は不滅になりそう。メリメの原作をオペラ化したこの作品は、初演のときは不評だったが、今はフランス・オペラの代表作。ジプシー女カルメンと、恋するあまりカルメンを殺してしまうホセの物語は、恋物語の典型

型となった。躍動感あふれる前奏曲だけでも、オペラの熱気はわかる。



11. 交響曲第8番——ブルックナー

三菱自動車のサイクロン・エンジンが空中にその姿を見せると、思わず「このエンジンはエネルギーがあって重厚だ」とってしまうのは、きっとブルックナーのせいだ。重々しいだけでなく、長大さでも有名なのがアントン・ブルックナーの交響曲だが、第8交響曲の第4楽章の、ごく一部だけでも、そうした特徴が聴こえてくる。ブルックナーは第9番まで書いているが、これは未完なので、第8番のは最後の第4楽章ということになる。

12. 大地の歌——マーラー

マーラーは確かに「時代に合ってきた」ようで、今やブーム。尾形光琳の絵と合わせたサントリー・ローヤルのCMも、ブームの一部となった。「大地の歌」はグスタフ・マーラーの9番目の交響曲。だがマーラーは、ベートーヴェンが9番完成の後にシンフォニーを書けなくなったことに始まる「不吉な9番」のジンクスから逃れるため、あえて「大地の歌」とだけした。中国の詩のドイツ訳を使った6楽章の交響曲だ。CMで使われたのはその第3楽章「青春について」の一部。「小さな池の中に、緑と白の陶器のあずまやが立っている……」と歌い始め、中国のどこかで酒をくみ交わす様子が描かれる。



13. 交響曲第1番——ベートーヴェン

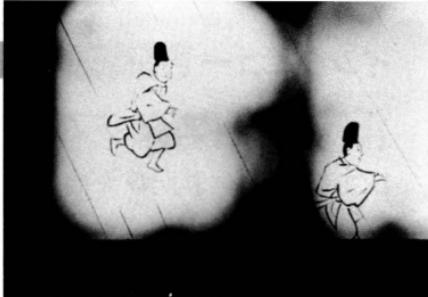
指揮者の合図で演奏を始めるオーケストラ。だが指揮者は言う「『第5』じゃないよ、『第1』だよ」というわけで、第一家庭電器はもちろん第1交響曲だ。その第1楽章。このCMは10数年前の「名作」だけれど、ベートーヴェンの交響曲が復活しているので、第1交響曲のCMも復活の兆し。29歳のベートーヴェンが書いた初めての交響曲で、もうはっきりと個性的だし、力いっぱい良さがある。

14. 交響曲第5番——ベートーヴェン

ベートーヴェンの交響曲の中で「運命」はあまりにも有名。そしてこれは、やはり極限的な交響曲だ。断片がどんどん積み上げられ、あれよあれよという間に、巨大な交響曲になってゆく。冒頭は例の「タタター」という、どうということのない主題だが、このモチーフをバネとして、燃え上がっていく。

オリジナルの解説書では、このページに歌詞がありますが
このPDFでは、歌詞を省略させていただきます。

オリジナルの解説書では、このページに歌詞がありますが
このPDFでは、歌詞を省略させていただきます。



全曲盤参考レコード

- ① なし
 - ② ポスコフスキー指揮／ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団～CC30-9045(CD)
 - ③ カラヤン指揮／ベルリン・フィルハーモニー～EAC-81002(LP)
 - ④ ポスコフスキー指揮／ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団～CC38-3029(CD)
 - ⑤ ランチベリ指揮／フィルハーモニア管弦楽団～CC33-3342(CD)
プレヴィン指揮／ロイヤル・フィルハーモニー～CC33-3620-1(CD)
 - ⑥ プレヴィン指揮／ロンドン交響楽団～EAC-55029(LP)
 - ⑦ プレヴィン指揮及びピアノ／ロンドン交響楽団～CC30-9032(CD)
 - ⑧ カラヤン指揮／フィルハーモニア管弦楽団～EAC-55049(LP)
 - ⑨ クリュイタンス指揮／バリ音楽院管弦楽団～CC33-3396(CD) EAC-40075(LP)
 - ⑩ 小沢征爾指揮／フランス国立管弦楽団～CC30-9008(CD) EAC-90213(LP)
 - ⑪ シューリヒト指揮／ウィーン・フィルハーモニー～EAC-55043～4(LP)
 - ⑫ クレンペラー指揮／フィルハーモニア管弦楽団～CC33-3265(CD) EAC-81017(LP)
 - ⑬ クリュイタンス指揮／ベルリン・フィルハーモニー～CC25-3742～7 (CD) EAC-55103(LP)
 - ⑭ フルトヴェングラー指揮／ウィーン・フィルハーモニー～CC35-3162(CD) EAC-50061(LP)
- CDが発売されているものはCDのみ記載いたしました。

CMフォト協力

日産自動車株式会社／三菱自動車株式会社／マツダ株式会社／いすゞ自動車株式会社
サントリー株式会社／株式会社文明堂／東京海上火災保険株式会社
株式会社博報堂／第一企画株式会社／株式会社電通／株式会社マッキャンエリクソン博報堂／協同広告株式会社
株式会社CMランド／株式会社玄光社

演奏者とスタッフの心がひとつに結晶した宝石のよう

レコード録音体験記●大橋佳子



エアロピクスと生け花を教える、好奇心旺盛で、年齢は気にもとめず、じっとしているのがきらいな、活動的なミズ。

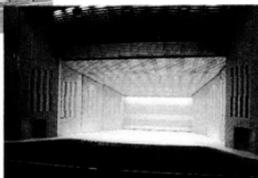
(家に帰れば小6男子の母)

3月18日、午前11時前、近畿大学ホール着。このホールは、昨秋完成したばかりで、外観はレンガ作り、中は、木の色が暖か味を添える。完成記念の、こけら落としの演奏会を大フィルがやったという縁と、録音に丁度よい大きさという事で選ばれたようだ。録音スタッフの方は、私達が着く大分前から、準備に余念がなく、舞台には、長短のマイクが立ち

並ぶ。長いものは、4 m程もある。それもそうだ。何しろ、100人からのオーケストラの音を、最良の状態で録音しようというのだから。それにしても、昨日の雨がうそのように上がったのはいいが、曇天で膚寒く、おまけに、録音の為、エアコンが使えず、楽団の方々は、指や管楽器が暖まるまで、時間がかかるだろうと思う。

12時、リハーサル開始。

いよいよ始まったとワクワクして来る。何回かの練習のあと、テスト録音。その再生音を、指揮者とコンサートマスターが聞いて、マイクのセッティングが直され、最良の状態で音を拾う為の努力が続けられる。ブース中のディレクターは、総譜を見ながら、細かくチェック。時々、マイクで、舞台の指揮者に指示がとぶ。又、リハーサル。何回かのやりとりのあと、本番。これを、Take 1 という。より良いものを求めて、数字を重ねながら録音していく。録音開始第1曲は、スタッフとオケのウォームアップを兼ねて、短い曲が選ばれたようだが、それでも30分もかかる。



2曲目。ヘンデルの「クセルクス」よりラルゴ。ソプラノと管楽器が入る。2回通し練習のあと、Take



1。管が入った為、又、マイクの長さの調節がなされ、静けさの中に、緊張感がただよう。ピアノシモから入るソプラノが、だんだんクレッシェンドしていき、天から降って来るような声に聞きほれる。音の終わったあとの余韻がとてもいい。丁度よい残響で、やわらかい感じ。

——お疲れ様でした。寒くなかったですか。

井岡—録音は、初めての経験なので、もう緊張して、そんな感じませんでした。



——歌手の方は、朝、声が出にくいとか聞きますが、ウォームアップに、どの位時間がかかりますか。

井岡—最低でも1時間以上。理想を言えば、昼から発声練習を1時間位して、昼食をゆっくりとって、練習して、夜本番というのが最高なんです。

——空調についてはどうですか。

井岡—ない方がいいです。空気が乾燥しますから。できれば、暖かくて、適度な湿度があればと、ぜひとくな事言っていますが。

話している声は低く、ソプラノ歌手とはわからない程。親しみやすい、感じのいい人で、つついこちらも乗ってしまって、インタビューじゃなく、ずっと前からのお友達と、気楽なおしゃべりをしたという感じ。



休憩のあと、3曲目。「花のワルツ」きれいな曲。オケの音をじかに聞きながら、心はスイング。スタッフもオケも、いよいよ乗ってきた感じ。いいぞ、いいぞ。

テノールの岩城さんに、インタビュー。体格がいいので、お聞きしたら、高校時代はラグビー部だったとか。それで、あのボリュームのある声が出るの



かと納得。

——のどの為に、何か気をつけている事ありますか。岩城—ことさらは何も。酒はやりませんが、タバコは吸いません。毎朝、黒酢を飲むようになってから、風邪をひかなくなりました。

ソプラノの井岡さんとは、大阪音大からの同期生。現在、お二人共、関西歌劇団で、活躍中。すっかりお二人が気に入った私は、絶対、オペラを見に行きますからと、再会を約して別れました。さわやかな二人。がんばって。



それにしても寒い。休憩中は、管楽器のピッチが下がるといけないので、鳴らしたり、上着の中に入れて暖めたり、大へん。7～8分の長い曲の場合、何度も何度も、初めから取り直しだと、寒いせいもあって、楽団の方、イライラして来るんじゃないかと思う。

4時から、ベートーヴェンの2曲。迫力ある音、さすが！ 録音関係者以外はいないこの広いホールで、何だか自分だけが、オケの音を独占しているような、ぜいたくな気分。

5時前、終了。寒い中、皆ががんばったもの。お疲れ様。録音室内にも、ホッとした安堵感がただよう。もう一日、明日もがんばりましょう。

二日目。昨日より少し暖か。おだやかな気候。開始前の緊張の中、時間をさいてもらって、コンマスの岡田さんに話を聞く。実質的に、オケを代表する立場の人。指揮者と楽団のパイプ役として、演奏面で気づいた点などの指示もされ、精神的にも大へんな仕事。

午前11時、開始。ガーシュウインの「ラブソディー・イン・ブルー」。指揮者とピアノの小原さんが、要所所の出だしを、何度もチェック。管からの要望や、ディレクターからの指示等有り、何度も入念に、リハーサルが続けられる。take2,OK！ オケの休憩の間、ソロの部分のみ収録。広いホールに、ピアノの音だけが響く。終了後のインタビュー。



——お疲れ様でした。このホールはいかがでしたか。小原—観客がないのが、ちょっと響きすぎるように

思います。残響があるので、余韻が消えてから、次の音を出すと、少し間があいてしまうように思います。



手を見せていただいたら、そんなに大きくはないが、指が太く、しっかりした手。それであの迫力ある音が出るのかと納得。なかなかの好青年。御活躍を祈ります。

それにしても、100人からの個性集団をまとめる指揮者は、大へんだろうと思う。録音の場合は特に、指揮者の人格、大きくものを言うのではと思われ、インタビューに臨む。——コンサートと違って、録音の場合は、大へんでしよう。



手塚—スタッフとオケの緩衝壁にならないといけなくてすからね。

—大フィルとのつき合いは長いんですか。



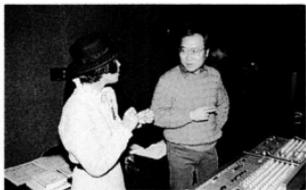
手塚—4年前まで、11年間、指揮者でした。

あー、それで、この仕事に選ばれた訳だ。オケをよく知らないのと、又、楽団員から信頼されていないと、この長丁場の仕事はできない。手塚さんによれば、指揮者には、二つのタイプがあって、一つは、ほおっておいたらまとまりのつかない個性集団の、統率者であるというのと、二つ目は、その個性のいい所を、最大限に引き出そうとする立場と。

「私は、二つ目がいいと思います。」と言うと、「ほくもそう思ってやっています。」との事。出ている、出ている。その暖か味のある気さくな人間性が、そのままりハーサル中にも出ている。冗談の言える、ほんとに気さくな、でも、いい音楽を作ろうという情熱を、スリムな体にひめた、とても素敵な方。

ここで、オーケストラという一つの巨大楽器を裏から支える人々を、紹介します。

組合委員長…「メンバーの生活水準の向上が組合の基本的な考えですが、それがひいては、観客に、いい音楽を提供できる事になるんだと思います。近頃、コ



マーシャルに、クラシック音楽が沢山使われるようになり、企業が目をつけてくれたのは、当然の事だと思います。というのは、100人からの人が集まって、一つの音楽を作り上げるという事は、豪華だし、ぜいたくな事だから。」と、自らもヴァイオリニストで、やさしそうな藤井さん。熱っぽく語ってくれました。

事務局長…「基本的には、オケをよくする事が仕事です。具体的には、企画から経済面、団体交渉などです。」と、昨年10月までは、コントラバストップだった宮沢さん。オケの内部事情をよく御存知なので、メンバーの立場に立った企画をと、精神的に動かれています。

ステージマネージャー…演奏が始まるまでの舞台上での一切の仕事。楽器から譜面台の手配等、大へんな仕事。このように、陰で、いろんな人に支えられて、いい演奏が出来上がるんだと実感！

録音サイドでは、やさしそうなミキサーの池田さん。時々、ディレクターからの指示で、マイクのボリュームレバーの操作をしている。

ディレクターの里見さん。「大フィルさんは、テ



キバキしていて、さすがプロ。順調に進んでいます。」との事。忙しい合間をぬっての、つかの間のインタビュー。緊張が続く中、申し訳ないみたい。

今日は、ポピュラーな曲が多く、特にワルツなど、ディレクターからも、「いいですねー。」との声が出る程の出来ばえ。私も思わず踊り出しそう。順調に進んで、午後2時、無事終了。ほんとに、お疲れ様！

あー楽しかった。二日間の感想です。細切れの休憩中の、団員の方々とのおしゃべり。スタッフにうながされて、やっと時間がオーバーしている事に気がつく程、乗ってしまったインタビュー。皆々、やさしく、おもしろく、いい人達に囲まれて、ほんとに楽しく仕事が出来ました。今まで知らなかったオケの裏側や、録音状況等、非常に興味深く、貴重な経験をさせていただいたスタッフの方々に、感謝いたします。

このCDを手になれます皆様、これは、演奏者、スタッフの心が一つになって出来上がった、磨きぬかれた宝石にも匹敵するものです。どうぞ、よくかみしめて、じっくりお聞きいただきたく思います。いい音楽は、皆の心の和から……

Vive 大フィル！ Vive スタッフ！
Vive 人間！ Merci beaucoup！



プロフィール



(指揮者) 手塚幸紀

1940年東京に生れる。
1958年東京芸大器楽科
にフルートで入学。1960年より一年間、斎藤秀雄氏
のもとで指揮法を学び、62年より学内で指揮活動
を行う。64年に東京芸大指揮科に再入学、渡辺暁雄、
山田一雄両氏に師事する。

1967年民音指揮者コンクールで第1位を受賞し、
注目を集める。翌68年、芸大卒業と同時にヨーロ
ッパ各地を回り、3月から12月までベルリンに学び、こ
の間にR I A S放送のためベルリン・ラジオ・シンフ
ォニーを指揮する。1969年帰国し、1970年2月に日
本フィル指揮者に就任、日本フィル定期をはじめ、
京響、東フィルの定期演奏会、テレビ、ラジオに出
演し活動を広げる。1971年11月より文化庁派遣海外
研修員としてヨーロッパ、アメリカで研修を積み、
1972年8月に帰国、同年10月より1983年8月まで大
阪フィル指揮者をつとめる。また、新日本フィル指
揮者団に加わる。

1983年4月から1985年3月まで京都市交響楽団正
指揮者を務める。現在は名古屋フィル首席客演指揮
者の他、日本の主要オーケストラを数多く指揮して
おり、常に安定した高い評価を得ている。



(ソプラノ) 井岡 潤子

昭和34年3月5日生

昭和56年大阪音楽大学卒業、同大学
院終了。関西歌劇団所属。オペラでは、
モーツァルト「後宮よりの逃走」の
コンスタンツェ、ヴェルディ「ドン・カ
ルロ」のエリザベッタ、レオンカヴァ
ロ「バリアッチ」のネッタなどの主役を演じ、特に今春
のネッタ役では、情熱的な歌唱と演技で大好評を博した。
張りのある美声で、強い感銘を呼ぶ大型ソプラノとして将
来を嘱望されている。



(テノール) 岩城 拓也

昭和31年3月29日生

昭和56年大阪音楽大学卒業、同大学
院終了。関西歌劇団所属。オペラでは、
モーツァルト「後宮よりの逃走」のベ
ルモンテ役で好評を博し、引続き、ヴ
ェルディ「ドン・カルロ」のドン・カ
ロロを演じ、主役テノールとしての地歩を固めた。

大阪フィルとは「第九」等のソリストとして度々協演。



(ピアノ) 小原 久幸

昭和29年12月27日生

堀川高等学校音楽科ピアノ専攻卒。
京都市立芸術大学音楽部ピアノ専攻卒。
園田高弘、下村和子の各氏に師事。

1982年に大フィルと共にショパンの
ピアノ・コンチェルト第1番を弾き好評
を博す。その他、近代のものを中心としたソロ活動及び室
内楽など、主に関西において幅広く活躍している。

現在、大阪芸術大学非常勤講師。

終戦翌年、池にコイがわくような結団から40年…

大阪フィルの歴史は、朝比奈隆が着の身着のまま、満州から神戸に引き揚げてきた時（1946年秋）に始まる。年末、NHK・大阪の第1スタジオ（現在もラジオ番組の制作に大活躍中）に、復員したり引き揚げてきた音楽関係者が7、80人も集って、オーケストラは自然発生的に、池にコイがわくような形で誕生、翌年1月25日に、占領米軍の許可を得て、ドヴォルザーク、「新世界」を演奏、それはJOBKの電波に乗って、焼跡の、大阪の街々に流れた。そのドヴォルザークは、むやみとテンポが速かったという記憶だけが、今も、私には残っている。このオーケストラ放送は月に1回だった。春を待たずに、放送スタジオから街に出て、ステージでコンサートをやろ

うという声で、メンバーの中から起った。それが結実したのが、昭和22年（1947年）4月26日に大阪朝日会館で開かれた関西交響楽団（大阪フィルの旧称）第1回定期演奏会である。朝日会館はすでに取りこわされて、いまは高速道路になっているが、戦前から戦後にかけて半世紀に近く、大阪の音楽の殿堂として、クラシック・ファンにしまされてきた。

朝比奈隆&ヒズ・オーケストラの前途には、苦難の道が待ちかまえていた。当時住友銀行の頭取だった鈴木剛（故人）が資金を調達、商工会議所会頭だった杉道助が会議所（現在のサントリービルの西側附近）の4階を練習所に提供するなど、スタートは切ったものの、楽団の収入は映画の“ゲキバン”出



演で受け取るギャラだけ。とても経営といえるものではなかったようである。「東映、大映、松竹と契約して、夜中に徹夜で、近藤勇も忠臣蔵も鞍馬天狗も何でも手当りしだいやったネ」と、朝比奈は回想する。

徹夜のアルバイトが明けると定期演奏会である。血相変えてカリカリ、ギコギコ弾きまくるベートーヴェンやワーグナーを、かけ出しながら、いっばしの評論家を気取った私が、身も皮もない骨ばかりの演奏と、繰り返してこきおろしたのは昭和30年(1955年)前後である。

行きがかりで(というのも、かなり無責任な話のように聞こえるかもしれないが——)昭和31年に



生まれたばかりの京都市交響楽団に、私は、意識的に肩入れをせずにはいられなくなった。コブレンツ生まれのカール・チェリウス(故人)が初代の常任指揮者に招かれて、こつこつ、こつこつ、まるで細工物をつくるように、彼のオーケストラを育て上げようと、はげみにはげんだ。長い間練習したモーツァルトやハイドンを、きちんとやる京響の演奏は、ベートーヴェンやワーグナーを大雑把にでっち上げる関西交響楽団とは、まったく対照的だった。“それにひきかえて関西交響楽団は……”という筆法で、朝比奈&ヒズ・オーケストラとしての関西に、何度も噛みついた。

京都市響は、経営に苦しむ関西から、多くの貴重な教訓をくみ取って、市立のオーケストラとして発足した。当時の市長の英断と、初代の事務長の知恵を撻り合わせて、後に、京響の演奏活動の本拠となる京都公会館建設に至るまでの路線を開いた昭和30年代前半こそ、京都の楽壇の黄金時代だったといっただいだろう。

朝比奈隆は、昭和35年、音楽的にも経営的にも行きづまった関西を、鈴木剛の助言を入れて、解散させた。清水組に建ててもらったばかりの、ぜいたくな練習場(現在は大阪音楽大学の講堂)を、音楽大学に売りはらって退職金にあて、退職者を振り分けて、映画のためのオーケストラと、コンサート活動に専念する大阪フィルハーモニーと、ふたつのオーケストラを創設するという荒唐治をやったのけた手腕には、ただもう感心するばかり。生まれ違った大阪フィルの演奏力は、急速に伸展した。遠山信二(故人)、外山雄三、秋山和慶……を専属指揮者

として、つぎつぎに迎えるというスタッフの強化策が、効果を発揮し始める。昭和40年から45年にかけての急成長は、ちょうど日本の経済の急激な発展に平行した現象のように、目には見える。「大阪の秋・国際現代音楽祭」が昭和38年に始まり、55年まで続く間に、大阪フィルは大規模な現代作品を消化して、楽員の感性は飛躍的に広がった。この間の演奏曲目については、グローヴ音楽辞典（最新版）に詳細な紹介がある。

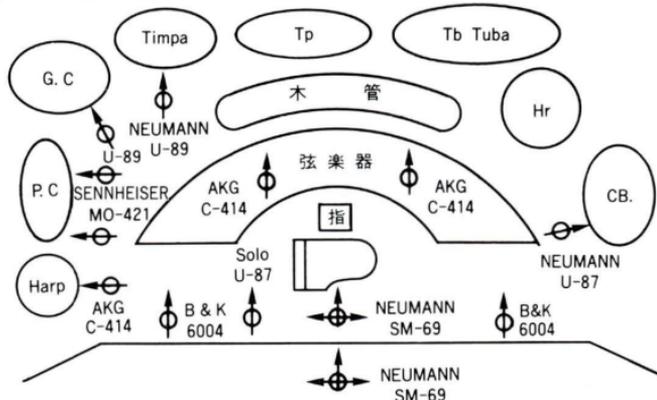
学習研究社版「ベートーヴェン交響曲全集」のレコーディング（昭和48年）を皮切りに、50年代に入ってから、大阪フィルのレコード制作には、はずみがついた。ベートーヴェンの交響曲全集に限ってみても、昭和53年のピクチャー、同60年に再びピクチャーと、3回収録している。51年のブルックナー交響曲全集、54年のブラームス交響曲全集のほかにはマーラー、チャイコフスキー、リムスキー・コルサコフの作品も、朝比奈=大阪フィルはレコーディングし（主としてキングレコード）、商業ベースに乗るオーケストラとしての地位を確保した。レコード発売枚数の最も多いオーケストラ、それは日本では朝比奈隆指揮大阪フィルである。苦難の道の果てに、ここに到達した。「たどりついたと思ったら、別の新目標がぼくを手で招くんだよ。やりきれないネ、このまま、80歳になるのかネ」と朝比奈はいう。大阪フィルはことし40歳。これから成熟期に向かうことになる。朝比奈隆には、世界の長老指揮者としての使命があるはずで、こんな所で息切れしてもらっては困るのだ。

大阪フィルが創設50周年を迎える1997年までに実現してもらいたい目標がひとつある。海外公演であ

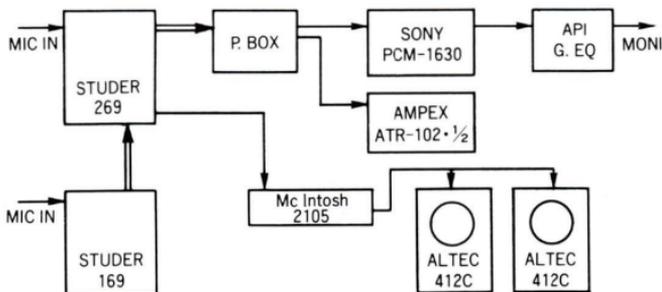
る。75年のヨーロッパ・ツアー、80年の北米演奏旅行、86年のヨーロッパ再公演など、海外公演は3度体験しているが、必ずしも商業ベースに乗った「興行」ではなかった。旅費を一般のファンから募るなど、かなり無理を重ねての強行であった。第4回の海外公演では、実力もそなわり、海外での評価も高まり、海外のマネージメントに招かれて——という形にならないものだろうか。同時に地元へのサービスも力を入れてほしい。ポピュラーなオーケストラの小品を、気楽に味わえるようなプログラムを、時には、提供してほしい。そういうプランには打ってつけの指揮者・手塚幸紀を、大阪フィルは、約4年ばかり前に、京都市響へ送り出してしまった。いまは、10年あまりの関西生活に終止符を打ち、東京に活動の本拠を移した手塚だけれど、ドビュッシーやラヴェルの作品で発揮した手塚の感性のきらめきが、なつかしい。山田一雄門下の逸材だけあって、これからは独自の進路を開き、着実に歩みつづけることだろう。どこか不器用な大阪フィルから、しゃれた表情を抽出できるのは、手塚の棒さびきだけである。



マイクセッティング



録音ダイアグラム



スタッフ

総合プロデューサー：

小山正敏 八田 甫

プロデューサー／

ディレクター：里見清司

バランス・エンジニア：

池田 彰

カッティング・エンジニア：

竹内昭五

ジャケット：

株グラバー企画

フォトグラファー：

伊藤 隆

制作協力：

近畿大学

録音年月日：

1987年3月18、19日

録音場所：

近畿大学11月ホール

企画・制作：

DAM推進委員会

DAMPC

製造：

東芝EMI株式会社

ラルゴ

Ombra mai fu

CMはクラシックがお好き

手塚幸紀指揮／大阪フィルハーモニー交響楽団

- | | | |
|---|--|------|
| ① | “ラルゴ”(ヘンデル曲)w/井岡潤子(ソプラノ)..... | 2:59 |
| ② | 「メリー・ウイドウ」より“ワルツ”(レハール曲)..... | 2:23 |
| ③ | 交響詩“モルダウ”より(スメタナ曲)..... | 1:59 |
| ④ | “美しく青きドナウ”より(J.シュトラウス2世、作品314)..... | 2:16 |
| ⑤ | 「くるみ割り人形」より“花のワルツ”(チャイコフスキー曲、作品71a)..... | 6:40 |
| ⑥ | 「ピーターと狼」より“ピーターのテーマ”(プロコフィエフ曲、作品67)..... | 0:49 |
| ⑦ | “ラプソディー・イン・ブルー”より(ガーシュウィン曲)w/小原久幸(ピアノ)..... | 5:33 |
| ⑧ | “天国と地獄”序曲より(オフエンバック曲)..... | 2:09 |
| ⑨ | “ポレロ”より(ラヴェル曲)..... | 5:32 |
| ⑩ | “カルメン”前奏曲より(ビゼー曲)..... | 2:13 |
| ⑪ | 交響曲第8番ハ短調第4楽章より(ブルックナー曲)..... | 5:34 |
| ⑫ | 「大地の歌」より第3楽章“青春について”(マーラー曲)w/岩城拓也(テノール)..... | 3:06 |
| ⑬ | 交響曲第1番ハ長調より第1楽章(ベートーヴェン曲、作品21)..... | 7:42 |
| ⑭ | 交響曲第5番ハ短調より第1楽章(ベートーヴェン曲、作品67)..... | 6:00 |

最新の写真集「1975年文化文庫」カンパニー株式会社、第一巻音楽写真集

電話：03-3497-2222

DAMPC
D&C Group